

ユリちゃんの「京都大学、医学部医学科」合格体験記

ユリちゃんのお母さんがボロアパートの一室で電話をしている。

「養育費が振り込まれてないのだけど・・・」

「そんな！ユリは今年大学入試なのよ」

「ちょっと、待って。きらないで」

お母さんはためいきをつきながら電話をきる。

お母さんが生命保険の証書を引き出しから出して何か決心したような顔をしている。

そこへ、ユリが帰ってくる。

「お母さん、それなに？」

「ううん、なんでもない」

「・・・お母さん、わたし大学に行ってもいいの？」

「何を言ってるのよ。大丈夫！私にまかせなさい！」

「うん・・・」

翌日、ユリの学校。バレー部の部室でキャプテンと二人で話しをしている。ぼろいジャージを着ているユリ。

「どうしても退部するしかないの？」

「わたし、国立大学に合格しないとダメなんです」

「クラブと両立させればいいじゃない！」

「わたしも出来たらそうしたいんです。でも、・・・」

「分かった。ユリは私たちを見捨てるんだ！！」

「え？・・・」

キャプテンは怒って出て行ってしまう。

ユリは淋しそうに立ちつくしている。

教室に戻るとエリカがユリに近寄ってくる。

「で、どうだった？無事に退部できた？」

「う、うん。大丈夫」

「でも、ユリはなんでそんなに成績いいのに頑張るの？」

そこへ、男子生徒が近寄ってくる。

「おい、ユリ。おまえ、いつもヨレヨレのジャージだなあ。勉強できてもさ、

それじゃ女としておわってない？」

「ちょっとお、それ、ヒドインじゃない！！」

「エリカちゃん、いいの。私、気にしてないから」

「あんなバカ、放っておこう。ところで、3年から予備校に行く子多いけど、ユリは？」

「うちは、そんな経済的余裕ないわよ」

「じゃ、高木塾に行けば？あそこ安いって。それにオンラインで無制限に質問ができるらしいよ」

「そうなの？」

高木塾の事務室で、高木先生が通帳を見ながらうなっている。

「うーん、今月もギリギリだあ」

「英検の勉強と京大受験に100万円以上つぎこんだからなあ・・・」

コピーの修理をしている業者が尋ねる。

「そんなにお金がかかるんですか？」

「1回受けるのに新幹線代、宿泊代、受験料など総額7万円」

「それが、なんで100万円になるんですか？」

「7回受けたから、それだけで50万円くらい」

「えー！！？？その年で高校生に混じってですか？」

「みんな、そう言う(笑)」

「私はお酒飲まない、タバコ吸わない、ギャンブルやらない、女嫌いだから、その分を勉強にまわしているんだよ」

「なんか、スゴイですね」

ユリのアパート。ユリが母親に話しかける。

「お母さん、私、塾に行きたい」

「え？今まで一人で勉強するって言ってたじゃない？」

「でも、今回の模試の結果ね、これ。ボーダーぎりぎり」

模試の結果を見せながら言う。

「高木塾って安いけど、とてもいい先生だって聞いたの」

「京大を7回も受けて英語8割を実証した人なの」

「そう？じゃ、お父さんにちゃんと養育費を払ってもらわなくちゃね」

「うん」

高木先生の塾。ユリちゃんが相談をもちかけている。

「私、医者になりたいんです。でも、お金がない」

「それなら、防衛医科大学か自治医科大がいい」

「どうしてですか？」

「いくつか条件はあるけど学費を実質無料にできる」

「え？そうなんですか？」

「しかし、そういう大学には優秀な受験生が殺到する。かなりの難関だよ。旧帝でも奨学金と家庭教師のバイトで何とかなるんだけど、こっちも超難関」

「私、医者になってお母さんを経済的に支えてやりたいの」

「そうか・・・」

「じゃ、家庭学習中の質問はチャットワークでね」

「でも、先生、無料で無制限に質問できるなんて儲からないね」

「まったく、そのとおり！」

「ははは」

二人で笑っている。

ユリちゃんのお母さんはパート勤務のスーパーでマスクをしながらお菓子棚の整理をしている。そこへ、子供が近寄る。その瞬間、お母さんが咳をする。子供の母親が近寄ってきて怒鳴る。

「なにすんのよ！！うちの子にコロナがうつったらどうすんのよ！」

「ご、ごめんなさい」

「もう、本当に！気をつけてね」

母親に会いに来たユリがそれを遠くから見ている。こぶしを強く握る。

目には涙が浮かんでいる。

受験の5日前。最後の追い込み。自宅アパートで勉強しているユリに異変が。突然、手がふるえだす。

「あれ？どうしたのかな、私」

すると、足も痙攣を起こし始める。そのままイスから落ちて床の上で痙攣を起こすユリ。気づいたお母さんが慌てて近寄る。

「ユリ、どうしたの？」

「あ、あ、」

お母さんは急いで救急車を呼ぶ。ユリはそのまま近所の病院に運び込まれる。看護師が何人も集まりユリを載せたストレッチャーから診察台に移す。

診察を終えた医師がお母さんと呼んで話をしている。

「お母さん、これはノイローゼの一種です。勉強しろ、勉強しろ、と言いま
せんでしたか？」

「いえ、そんなことは…」

「でも、よかった。頭にきてたら大変でしたよ」

「あの、5日後に大学入試があるのですけど」

「え？…うーん、それは無理かなあ…」

「でも、あの子、そのために今まで頑張ってきたんです」

「うーん、医者としてはお勧めできかねますが、とりあえず様子を見ましよう」

病室で、夢を見ているユリ。雲のうえで高木先生と話をしている。

「ユリさん、大丈夫だよ。私も大学受験の前に事故にあってね」

「そうなんですか？」

「うん」

「ドクターストップがかかったけど、強行受験だった」

「で、合格されたんですか」

「運が良かったと人は言ってる。でもね、私は神様に助けてもらったと思っているんだ」

「数学が好きな先生らしくないですね(笑)」

「うん。落ちこぼれだけどクリスチャンだからね。あれから、私は助かった命を大切にしようと決めたんだ」

「ふーん…」

「だから、私は医者になりたい子を応援したいんだ」

高木先生が塾の仕事を終えて帰宅したら部屋が真っ暗だった。電気をつけたらテーブルの上に置き手紙らしきものがある。手にとって読む。

「実家に帰らせてもらいます」

高木先生は、数日前の喧嘩を思い出す。

『だって、子供に罪はないだろう！』

『なによ！子供たちより仕事優先のくせに！』

『仕事がうまくいかなかったら親の土地も担保に入っているんだぞ』

『子供の養育も教育費の貯金もすべて仕事あればこそなのに、なんで分かってくれない！』

『英検1級や京大レベルの指導が必要な子なんか、こんなド田舎にいるわけないでしょ！！バッカじゃないの！』

『銀行にも負け組って融資を断られで、情けないったらありやしない！』

翌朝、高木先生は目玉焼きや味噌汁を作ろうと悪戦苦闘している。そこに娘(小学高学年)がやってきて

「こんな焦げた目玉焼き食べたくない。私が作る」

「子供に迷惑をかける親なんて最低だからね」

情けない顔をする高木先生。

1か月後。京都大学の合格発表の掲示板を見ているユリ。

「あった……。お母さん、先生、あった……」

東京の大手出版社の中。編集長がアマゾンの電子書籍を見ている。

「おい、この『ユリちゃんの「京都大学、医学部医学科」合格体験記』の原作者か作画した漫画家にコンタクトをとってくれ。京大医学部に3名合格させたいらしい」

終わり